

第四部 ある男の歩んだ人生

(特一) 飛驒高山

一九〇五年（明治三八年）の末、飛驒の高山で一人の男の子が生まれ、名前を「紅」と付けられた。

明治三八年の年末といえば、日本中が日露戦争の勝利に湧いていた時代。勝った、勝ったと国民が騒ぐ一方で、軍国主義や帝国主義が叫ばれ、ロシアを宿命の敵国として、北海道の開拓が急がれた時代でもある。

岐阜県の飛驒は雪深い辺境の地。二一世紀の今でも、そのイメージは消えない。

「紅」という男の子の名前はきわめて珍しい。これは推測だが、多分この背後に赤という色にこだわるロシアとか、ロシア軍のイメージがあるように思われる。

明治三八年末、ともかく「紅」は飛驒の高山で生れた。現地まで調べに出掛けたが、父親の名前も職業も分からない。しかし、確かに「紅」はそこで生れ、小中学校に通った。

そうした日々の中で、「紅」は二つのことから目を離せなかった。一つは先が急がれる北海道の開拓。もう一つが、彼の周りで噂される若い娘達のことだった。

海からも遠く、標高の高い飛驒一帯は当時、本当に貧しかった。だから、出稼ぎの口が掛かると、北アルプスを歩いて越えても、わずかな賃金に釣られて、飛驒人の多くが出稼ぎに出掛けた。その一つに信州の諏訪湖一帯で広がる製糸工場への出稼ぎだった。

季節は毎年春先から晩秋に至る半年余り。主役は飛驒の十代半ばから始まる若い娘達。ただし、後日「野麦峠」という小説と映画でよく知られるように、二千メートル級の往復や越えに加えて、高温多湿の工場で長時間働かされた飛驒の若い娘達の中に、次々と肺病やみ、自宅のある飛驒に戻ってから、部屋の片隅に追いやられながら、虚しくも悲しく死んで逝く者が絶えなかった。その哀れな姿や話が「紅」のころを捉えた。

「紅」はそこで、大学を今の千葉大学の医学部とし、医師資格取得の直後に北海道の開拓地に生きる医者として働き始めた。しかしそんな日々のなかでも、「紅」の心の中には野麦峠に出てくる飛驒の娘達の姿があった。

―、いつの日にか故郷に戻り、あの肺結核に苦しみながら死んで逝く娘達を医者として救ってやる。―

と心に誓っていた。

満州事変以降、「紅」は傷病兵の集まる小樽に仕事を移し、終戦までそこで傷病兵の治療に当たる一方、溜まってきた財産を投じて陸軍と海軍に各々一機の飛行機を贈っていた。

昭和二十年の終戦後間もなく、小樽港に運ばれてくる傷病兵の数は減った。そんな状況下で、「紅」は決断の時を迎えた。

―故郷の飛驒に戻り、あの娘達を救う。―

その言葉通り、「紅」は飛驒に戻った。そして国立の結核診療所の所長となり、念願の結核治療活動を始めた。しかし、そこに彼の夢を果たす場は結局なかった。

問題は結核診療所の運営権を県が持つか、国家が持つか、という話だった。それ自身、「紅」にとって意味のないやりとりだったが、絶えず会議、会議で妨げられる結核の治療状況に、「紅」は絶えられなかった。

しばらく「紅」は考え、悩んだ。悩みの中で彼は人生最後の決断を下した。―真に不本意ながら、儂は北海道の小樽に戻る。そこで小さくても民間の診療所を開き、死場とする。もう飛驒には戻らない。―

「紅」の決断にもう迷いはなかった。ただ、小樽に診療所を開くにしても、一つ気掛かりなことがあった。それは後継ぎのことだった。

「紅」の夫婦に何故か子供がなかった。それだけが「紅」の悩みだった。故郷の飛驒を去るに当たって、「紅」は古くからの知人友人に頼み込んだ。―小樽に戻り、自分の診療所を開く。ついては後継ぎの問題がある。どうか私のために優秀で性格のいい子供を探して欲しい。是非頼む。この通りだ。

その言葉を故郷に残し、まもなく「紅」は飛驒の高山を去った。

その一年後、小樽で暮らし始めていた「紅」の元に、適当な子供が居る、という連絡が届いた。それを受けて、「紅」は妻を伴い飛驒に戻った。

ある日ある場所で「紅」は養子候補の相手に出会った。よく見ると、端正な顔立ちの子供で、利発そうな眼が印象に残った。だから「紅」はその場で子供の両親に頭を下げ、よろしくお願い致します、と言っていた。

小樽に引き取ったその子供は旧制の中学から小樽の高校に移り、ともかく無事な日々が続いた。だが、

―儂の後継ぎになってこの診療所を引き継いでくれ。―

という言葉が喉もとで止まってしまう。それに、あの子にどの程度の能力があるのか、判断できない。止むを得ず、その話は長い間「紅」の胸にしまうことになった。

だから、養子の「亨」が東大の文学部に入ったのには驚いた。それにもまして、その翌年、日本医大にまで合格した、と聞いたときは飛び上がるほど嬉しかった。しかし「紅」は、とうとう死ぬまでその言葉を口には出せなかった。

(一) 出会い

大学の心理学教室で私が助手になった前後(昭和四五年当時)、大学全体が建築ラッシュの時期を迎えていた。伝統的な古い木造の建物が次から次へと姿を消し、新たなビルディングがあちらこちらで姿を見せる。そして、大正時代の建造物だった私達の建物も新しくなり、遅ればせながら私も五階建てのビルに移る日を迎えていた。

助手の私に教室から与えられた部屋はその五階。隣には言語学の助手室も並んでいたが、そこに人の姿を見掛けることは少なかった。

ある日、私の研究室のドアを慌ただしく叩く音がして、一人の男が入ってきた。それは眼鏡を掛けた中肉中背の男で、年齢的には私より十歳ほど上の人物だった。ところが、部屋に入り込むと、彼の口から大きな声が飛び出した。

「やあ、初めまして。私は浅井といいます。部屋は隣で、取り敢えず言語学の助手をしています。これから隣同士、よろしくお願いいたします。」

それだけ言うと、彼は笑顔を見せながら、また私の部屋を出ていった。

やがて彼とは、五階の廊下で会おうことも多くなったが、通り一遍の簡単な挨拶だけに終わる日々がつづいた。そんなある日、彼がまた私の部屋に飛び込んで来た。

「あのですね。貴男はコントラクトブリッジというゲームを知っていますか？」

「・・・・・・？」

話は余りにも唐突だった。言葉もその内容もまったく知らなかった。

「それはどんなゲームですか？」

が、その呆けたような質問に、大きな落とし穴が待っていた。

彼はすぐ、同室の私より若い助手の北村君と共に、私達を自分の部屋に招き、そのトランプゲームについて講義を始める。それに引き続いて、その日長々と難しい訓練まで始めてしまったのだ。

当時、私は下北半島でつづけていたニホンザルの研究に夢中な時代だったから、まもなくその特訓に嫌気がさした。その上、若い北村君の方が話に熱中しているようだったから、途中で一言断り、自分の部屋に戻った。

やがて気が付くと、四人一組、その内二人が互いに仲間となって始まるそのトランプゲームが研究室全体のスタッフに広がり、直接の恩師に誘われたこともあり、わたしもその仲間に加わった。

そのトランプゲームは確かに遊びの一つだったが、一種の興奮や緊張の伴う二人一組の戦いでもあった。そして毎週土曜日の午後、浅井さんからの誘いを待つかのように、私の所属する心理学研究室のスタッフ全員が、そのト

ランプゲームに熱中する日々を迎えていた。

午後の一時過ぎに始まり、午後八時台後半に終わるゲームの日は、絶えることなく延々とつづく。そこでは教授も助手も同格とされ、身分の違いは認められない。

秀才を自負して憚らない助教といえども、プレーの仕方にミスがあれば、すぐその場で若い二十代の助手に怒られる。その失策はプレーの終わった後の反省会でもさらに追及され、怖い助教のイメージは台無しなる。

そんな日々がつづいたある日、大学紛争で荒れる大学の構内で私は浅井さんと偶然に出会った。

「鈴木さん、一寸話がある。聞いてくれるかな？」

「いいですよ、なんですか？」

「いやね、一緒に暮らしていない息子のことなんだけど、これが親爺の僕に似て大変なヤツだね。中学生のくせに会社を始めるといつて、この近くに事務所のある業界紙に大々的な広告を出す約束をしたらしいんだ。ところが、やはりその話は本人が取り消すという段になって、相手から多額の取消料を要求されているのさ。馬鹿な話だけだね。」

「そう、それは大変だね。」

「いやそれがね、例によつて相手が暴力団やヤクザ絡みの業界紙のことだから、要求額もひどいものなんだ。」

「で、これからどうするの？」

「今から僕が息子に代わつてあの事務所に出掛けるけれど、なにかあの中で起こる可能性もあるでしょ。だから貴男を男と頼んで、一つ大事な話を聞いて欲しい。」

「OK、それで僕はどうすればいいの？」

「僕がああビルに入った後、三十分ここにいて欲しい。それでも僕がああビルから戻らないようなら、すぐ近くの警察に届けてくれないだろうか。」

二人で交わしたその話は無事、余り時間を掛けず終わったようだ。なぜなら、約束の三十分を待たず、笑顔の浅井さんがまた私の前に戻ってきたのだから、……。

ただそれ以来、私達二人の男の関係は急速に深まった。彼はやがて我家のホームドクターを務めてくれるよい医者になり、独身の彼が我家で夕食を共にする機会も大巾に増えていった。

そんなある晩、彼は苦笑いを浮かべながら、私達家族にこんな話をしてくれた。

(二) 養子になった男

養子になった浅井さんは、飛驒の山奥から養父母のいる北海道の小樽に移った。そこで市内唯一の進学校だった小樽潮陵高校(旧制小樽中学)に入り、新たな人生が始まった。

高校に通いだして間もなく、彼は担任に教官室まで来るようにと言われた。そこで担任から思わぬ話を持ち込まれた。

「浅井君、君は今迄、飛驒の山奥にいたから多分、勉強の方は遅れているだろう。私が時間外に特訓して上げるから、毎週私の自宅まで来るようにしなにか。」

というのだ。その時ふと、彼は考えた。

「これは多分、養父母の差し金だろう。」

が、そう本人が思うにしても、それははっきり拒絶する言葉がすぐには見出せない。仕方なく、彼はよろしくと担任に頭を下げた。

やがて一学期も終わりに近付き、期末試験の当日を迎えた。彼はその時、余り無理をするつもりはなく、ごく自然体で答案を書きつづけた。そして試験結果が学校の一番目立つ壁に張り出された時、最初にあったのが彼の名前だった。

学校からの内密な連絡に、養父母は驚いた。そして不安になった。

「この子を失いたくない。それにしても、養子縁組を挨拶と言葉だけで済ましてしまったのが悔やまれる。オイ、どうする。どうしたらあの子を我家に留められる。本当にどうすればいいんだ？」

養父母が秘かに二人だけで悩んだようだ。そしてあることを決断した。

「アイツの実家に金を贈ろう。少し遅れてしまったが、理由なら幾らでも考えられる。金を用意しろ、手紙は俺が書く。」

間もなく、その金が為替で小樽から飛驒に送られた。悲しいことに、その金を実家の母親が受け取っていた。

後日、なにかの折りに、彼はその事実を知った。それから間もなく、彼の高校生活は乱れに乱れた。毎朝家を出ても、学校には行かなかった。街をぶらつき、小樽市内の港に出掛けて、様々な船員達との付き合いや会話に、一刻の安らぎを覚える毎日だった。

だがふと気付いたとき、大学受験の申請用紙が目の前にあつた。そこで彼は改めて考えた。養父母の期待を受けて立つか、あるいは、……。

毎日、規則通りに始まる夕食。親子三人で交わす会話は限られる。その間に彼は養父からのはっきりした言葉を待った。しかし、口元まで迫る最後の一言を、明治生まれの頑固な国粹主義者を自認する養父は結局、なにも口にできなかつた。

提出期限を目前して、彼は一人で決断を下した。

―よしそれなら、俺は東大に入る。医学部も医科大学も入らないぞ。―
翌年の春、東大に入った彼は文学部を選び、そこで言語学への道を取り敢えず選んだ。が、心も身体も穏やかではなかった。

ふと大学に出てみたとき、彼は同級生の島某に出会い、戦後の日本社会を学生運動で創設しよう、と誘われた。それと同時に、共産党にも興味を持ち、激しく社会運動をつづける共産党の活動家と行動する日々をつづけた。

しかし当時、共産党員狩りを意味するレッドパージに怯む日本共産党の幹部の発言に、共鳴出来ない自分がいた。そしてある日、彼は共産党の地下裁判に呼び出され、当時の野坂・袴田といった面々と直接対決することになった。

その前夜、学生アパートに戻った彼の頭に、様々なことが浮かんできた。そして自分なりの遺書のつもりで、一通の手紙を小樽の養父母に送っておい

た。
地下裁判は開始から八時間に及んだが、彼は共産党の活動を平和運動に切り替える、という幹部達の言葉に最後まで逆らった。地下裁判がどうにか終わり、自分がまだ生きていると思えた時、彼の第二か三番目の人生がそこから始まっていた。

彼はまず、当時の共産党から離れた島某達数人との活動を開始した。ただ、日に日に数を増す仲間の姿を見て、学生運動をつづけるには、それなりの資金が必要なことを痛感し始めた。

いくら頑張ってみても、学生一人ひとりのアルバイト代では高が知れていた。学生運動を本格的に立ち上げるには、やはりそれなりの資金が必要だった。彼は考えた。東大生一年目の終わり、彼の頭に一計が浮かんだ。

―よし、どこでもいいから私立の医学校を受けよう。そうして小樽の養父母には補欠入学の通知を受け取ったことにして、ある程度まとまった金を送らせよう。―

彼は本当に日本医大を受け、一切の受験勉強を省いたまま見事に合格した。そして予定通り偽りの手紙を養父母に送った。合格通知は手元に残り、特別入学金として二十万が必要になった、と相手に書き送った。

昭和二十七年、その二十万は全日本学生連盟（全学連）の創設資金になっていた。

(二) アイヌ語野外研究会

一九七〇年、昭和で言えば四十五年、浅井さんにはもう、東京に居残る理由もなくなっていた。自分が創設に関わった全学連の時代はすでに終わり、

自分より一回り以上も若い団塊の世代の学生達が全共闘を組織して、縦横無地に東京都内を駆け回る時代が目の前にあった。

彼は小樽ではなく、札幌に戻った。そこには北大があり、医学部も言語学科を持つ文学部もあった。

当然のことながら、東京を去る前の彼の手元には東大文学部の卒業証書と、一度も通わなかった日本医大から出た医師免許証があった。そして彼には一生、その二つの道を同時に歩む目標がどうしても捨て切れなかったようだ。

札幌に戻ると、彼は二つの顔を使い分けた。一つ目は当然ながら臨床医(内科)の世界、もう一つがアイヌ語学者の世界だった。

私との出会や付き合いは彼の言語学者の側面(文学部助手)。ところが彼は何故か、言語学の研究室に姿を現す時間が極端に少ない。そこで私はある日、大学の廊下で擦れ違う際に聞いてみたことがある。

「余り顔を見ないけれど、普段どうしているの？」
すると彼は、笑いながら言った。

「いやー、実はね。僕にはすることが一杯あるんだよ。一つは無医村に招かれ、半月から一月も札幌を離れたり、市内の病院で夜間勤務を依頼されることも少なくないんだ。それにね、東大の学生時代に通った旭川の神居コタンの酋長に、お前は俺の長男になれ、とみんなの前で宣言されたものだから、今や大人になった四人の弟や妹がいるんだ。ところがね、小さい時から僕をお兄ちゃん、お兄ちゃんと慕っていたその四人が揃って社会的な問題に直面するものだから、後始末に追われる僕には、頻繁に大学が遠くなってしまふのさ。」

「やあー、それは、……!」

私にはそんな話を聞かされても、どう答えていいか分からない。仕方なく、「じゃ、また。お元気で。」

といった無難な言葉を残し、その場を早々に引き上げる。そんな彼から、ある日突然話があった。

「やあ、鈴木さん。この夏休み、一週間程度僕に付き合ってくれないかな。実はね、アイヌ語を学びたいという学生達を集めて、この夏にサマーキャンプを予定しているのさ。そこにね、学生達も沢山来るけど、アイヌのお婆さん方が三人来るのさ。貴方、アイヌに興味はないの？」

「いや、僕も北海道生まれの人間だから、アイヌの人々の生き方に興味はあるよ。でもいつ、どこで？」

「狩勝峠の向こうに鹿追という町があるでしょ。あそこの山奥にある廃村の小学校を借り切っているのさ。昼間は無医村の診療所で医師を務め、夜はその小学校にみんなを集めて、アイヌ文化とアイヌ語を教える。またその席には阿寒湖畔と神居コタンと日高アイヌのお婆ちゃん三人も出てもらって、生

きたアイヌ教室を開こうという訳さ。時期は八月一日から一カ月間、でも鈴木さんが一家全員で来てくれるなら、一週間でもいいよ。」

「OK, じゃ出掛けるよ。」

話はそこで決まり。なにか騙されたような気もしないではないが、相手が浅井さんでは、今更断るのもどうかと思う。

約束の日、約束の場所に私達一家は気軽に車で出掛けた。しかしその先には一生忘れられない情景が次々に現れたのだ。

まず、現地に着いて二日後、旭川の神居コタンから一人のお婆ちゃんがやってきた。次の日には阿寒の湖畔から別のお婆ちゃんも到着した。そしてそのお婆ちゃんが到着と同時に、浅井さんを捕まえて頼み込んだ。

「あのね、浅井先生。私はここで先生に二つお願いがあるの。一つはさ、同居の息子達に遠慮があつて、私達五十年以上も前から、アイヌの食事をしていないの。ここでそれが食べられないかなあ、……?」

すると彼は無造作に言った。

「OK, それは承知したよ。それで次は、……?」

「次はね、私達アイヌは仲間が遠方から訪ねてきたとき、いつも儀式をやるでしょ。あれもここでやって下さいよ。」

「よし、それも分かった。任せなさい。」

その日の夕方から、浅井さんの弟子とも言えない男が台所に立ち、なんだかんだとやり始めたので、私はその姿に興味を抱き、脇に立って様子を眺めた。

彼の手元を見ると、粟や稗の種に交じり、ウバユリの根から採った珍しい粉や、普段私達が食べることのない干したウグイの姿もあった。

不思議に見える男は、やがてそのすべてを大鍋に放り込み、水を混ぜて長々と煮込み始めた。

「わ、凄い。これ本物のアイヌ食だよ。浅井先生、本当に有難う。」

その日の夕食の時、感極まった阿寒のお婆さんは叫んでいた。その反対に、神居のお婆さんはさめざめと泣いていた。その意味は誰にも明らかだった。

翌日の午後、浅井さんとその男は近くの河原に出掛けた。そして帰る時、彼等は両手に柳の枝を抱えていた。

みんなの待つ学校に戻ると、彼等二人は役割を分担しながら一気に仕事を始めた。それが終わる頃、みんなの目の前には、アイヌ独特の祭壇ができ上がっていた。丁度そこに、三番目のお婆さんが日高からやってきた。

「わ、凄い。これ一体誰が作ってくれたの?」

「決まってるじゃないの。浅井先生達さ。でも、浅井先生は魔術師か本当のアイヌじゃないの。余り驚かされるから、今迄声も出せなかったのよ。」

そう言ったのは神居コタンのお婆さん。

「でもね、先生。どうせここまで出来たのなら、本式の儀式に合わせた祝詞も頼みますよ。」

「仕方ないか。じゃ、僕が即興でやってみよう。」

かくて儀式が始まり、浅井先生のアイヌ語で奏でる祝詞が辺りに一杯に広がる。長々と、格調高く。

まず、三人の老婆が涙を流し始める。その姿を見て、女子の学生達も声を抑えながら泣き出した。

それは実に、不思議な世界だった。信じようとしても信じ切れない、幻のような光景だった。

時間が経った。みんなが寝静まり、静寂そのものの世界が辺りを包み込んだ。そんな中で、私は一つの悟りを開いた。

―対象が生きた人間であれ動物であれ、研究者の極地はこうでなければならぬと。―

それ以来今日まで、浅井さんは私の神に近い恩師であり、教師だったと思っっている。

(三) ブラックリスト

東京を逃げ出して札幌に戻った浅井さんの後を追いつけて、大学紛争の嵐が私の大学にもやってきた。正門はバリケードで塞がれ、授業もまったく開かれない。たまにやる教官会議は市内のホテルに会場を移し、大学の職員の間も大学構内から消えている。ただ、浅井さんや私のような人間は、ヘルメットとゲバ棒に身を固めた(?)学生達に片手を挙げて挨拶すれば、なんのことなく自由に入出入り出来る。

そんなある日、大学を出ようとしていた私と、午後から大学にこようとしていた浅井さんが正門の前で出会った。

「やあ、浅井さん。」

とこちらから声を掛けると、顔を挙げた浅井さんの様子がどうも変だ。

「どうしたの、なにかあった？」

ごく自然に口から出た私の言葉に、普段の笑顔を取り戻した彼から予想もしなかった言葉が出る。

「鈴木さん、一寸この隅に来て。あのね、一つ頼みがあるんだ。僕はこれから大学の生け垣に沿って北に歩くから、貴男はバリケードで大学を封鎖しているゲバ学生の様子を見る振りをして、このまま少しここにいてよ。なんだか、あのパトカーが僕を常に見張っているようなんだよ。」

「OK,それはお安い御用だよ。じゃ五分もしたらまた会うことにしよう。場所はどこにする？」

「じゃ、あそこに見える喫茶店にしよう。」

その言葉を後に残し、彼は北にゆつくりと去って行く。私は鞆を手に、その場近くで立ち止まり、片目は学生達の動きに、残りは眼の片隅でパトカーの様子を追い掛ける。

五秒、十秒、そして二十秒が経つ頃、そのパトカーが私の背中をかすめて北に向かう。

―これは間違いない！―

そう思いつつ、改めて喫茶店に向かう。

「どうだった？」

後からやってきた浅井さんは笑顔のまま私に返事を求める。

「ご明察、確かにあのパトカーは貴方を追っていたよ。」

「やっぱり、そうだろうと思っていたけどね。」

「でも何故、こんなことになるの？」

すると彼は少し言葉を選ぶように、こう答えた。

「僕が東京にいた時代の悪行が祟ってるのさ。なんども逮捕され、例の三泊四日の留置所生活を繰り返していたからね。」

そう言う彼の姿に、寂しさの影が漂っている。

それから二年後、彼はすでに四十歳を越えていたが、本人の経歴や実力に合わせた定職がなか、なか見付からない。そう思って脇から眺めていると、ふとした弾みに彼はこんなことを口にした。

「実はね、これまで何度も教授や助教授の話があつてね。その内二、三の大学の教授会から正式の招請状も来ていたのさ。だけど結局、全部だめ。文部大臣の印鑑がどうしても押されてこない、という訳さ。大学の方もその理由がどうしても分からないといってきたよ。」

「で、浅井さん自身、その答えは思い当たるの？」

「勿論さ、日本の国家機関には内密のブラックリストがあつて、全学連の中心人物だった僕も、そのリストに載っているのさ。」

そうか、それもあり、だろう。どこにあるかは別にして、我々一般人がまったく知らないところには、そんなブラックリストが陰で働いていてもおかしくはなさそうだ。

―だが、それにしても、……………。―

私には世俗の世界にまだ、まだ知らないことがあるのだ、と考え込む。

さらにそれから五年後、少し慌てた感じで、擦り切れた黒の鞆を抱えたまま、浅井さんが私を選んで話し掛けてきた。

「あのさ、余り大きな声じゃ言えないんだけど、実は飛驒の実家の婆さんが俺と一緒に暮らしたいと、とうとう札幌に来てしまつてさ。面白くはないけど、今更追い出すわけにもいかないだろ。まいった、まいった。」

だが、その顔をよく見ると決して腹を立てている様子は見当たらない。かといつて、単純に喜んでいる風にも見えない。その婆さんは彼が養子に出た後で養父母から送られてきた手切れ金のようなものを受け取っていたのも事実だ。しかしその反面、そのお婆さんが彼の実母ということも、もう一つの現実に違いない。

戸惑いながら喜び、喜びながら戸惑う。そんな心境が今の彼の姿に現れている、という見方は間違っているだろうか。

(四) 三億円の遺産放棄

その日から時々、彼の口から繰り返し愚痴のような言葉を聞かされる。

「鈴木さん、家の婆さんはもう九十に近いのさ。だから僕は毎日、老人介護に追われているんだ。病院もあるし、こうして大学にも出ないわけにはいかない。だから、疲れが溜まってもう駄目だ。僕も歳だからねえ……。」
が何故か、その顔に苦悩の様子は見られない。

さらに時が経ち、彼は本当に困った顔で私に言う。

「やあ、家の婆さんたら、急に大変なことを言い出すんだ。もう私は死期も近いから、できれば故郷の飛騨か、飛騨の臭いのするところに戻って死にたい、というのさ。まったく困った婆さんだよ。」

その言葉通り、彼はその時困っていた。医者という肩書の他に、彼には言語学者という立場がある。だから、簡単に札幌離れることも、飛騨かその近くに移ること確かに出来ない。

「それは困ったね。」

例によって、無責任なことしか言えない私は、無難な言葉でお茶を濁す。

丁度その頃、小樽にいた彼の養父母が次々に死んでいた。死んで多額の遺産を彼の手元に残した。しかし、その遺産問題で再び彼の苦悩が始まった。

「、法律通り、素直に全財産を受け取るべきか？」

彼の父親も頑固だった。すぐ傍の札幌に養子の息子が医者として住んでいるのに、とうとうとう一度も、

「跡を継いでくれ。」

と言わず、口に出せなかった。だからもう一人の頑固者・浅井さんも自分から病院を引き受ける、という機会を逸していたのだ。

大きな遺産を前に、彼はしばらく悩み苦しんだ。でも最後に、彼の心は決まった。

「鈴木さん、小樽の法務局で遺産放棄の手続きを済ませてきたよ。総額三億数千万。でもそれは結局、僕と関係ないと分かったんだ。これですっきりしたよ。」

その顔は確かに明るかった。本人の言葉に嘘はないように見えた。しかし、それから間もなく、新たな問題に彼は一刻苦しんだ。

半年が過ぎ、彼もようやく五十歳を迎える時がきた。彼はもう、私の前で老人介護の話はしなくなった。だがある日、彼は本気で私の研究室に飛び込ん出来た。

「鈴木さん、大変だ。おふくろのこともあるし、遊び半分で富山大学に教授採用審査の種類を送っておいたのさ。ところがね、昨日になって本物の採用通知が届いてさ、びつくりしているんだ。」

「それはいい話じゃない。」

「でも、これまで何度もあつた話が途中で消えちゃったのに、今度はいいとなると、なんだか可笑しい気がするよ。」

「それもそうだね。変だよね。」

「あつ、分かったぞ。文部省が秘かに隠しているブラックリストの話はしたでしょ。あれが五十歳で切れたというか、僕を外したということに違いない。貴方、そう思わない？」

余りにも情報は少ないが、それはそうだと私も考える。そう思っていると、また浅井さんの飛躍した世界が始まる。

「ところでね、そうなるとあの婆さんと一緒に札幌から富山まで引越すという話になるけど、実は僕、金がまつたくないし、臨時の収入も期待出来ない。そこで養父の残した書類の山を最近になって整理していたら、僕名義のこんなゴルフ会員権が出て来たんだ。どうだろう、これを売れば五十万くらい手に入り、それで今度の引越しも間に合うと思うんだけどさ。」

その会員権を私は手に取って眺めた。そしてすぐ分かった。

「浅井さん、これの引き受け手を僕が探すかい？」

「うん、そういうこと。じゃ、頼むかな。」

「一寸待って、それは急ぐんでしょ？」

「うん。出来るだけ早い方がいいかな。」

私はその場で受話器を取り、問題のゴルフ場がある苦小牧の友人を呼び出した。彼は高校時代の同級生、しかも喧嘩ばかりしていたり、時間中に僕の答案を盗んで、自分の答案を書いていた男。そして今彼は、ゴルフ場近くである会社の経営者となっている、

「おい、僕だ。君あの有名なゴルフ場の会員権欲しくないか？」

「おい、それ冗談だろう。今どこの仲介業者のところに行つたつて、誰も売り手がないとこぼしているぞ。」

「まあ、それはともかく、今まさに僕の目の前にその会員権と所有者本人がいるんだぞ。」

「オイ、一寸待て。冗談は顔だけ、という話もあるけど、本当にそうか？」

「本当に本当だ。で、どうする？」

「行く、今すぐ金を持ってお前の家まで車を飛ばす。頼むから、間違いなくその人を手元から放すなよ。」

かくて電話は終わった。そして二時間後、我家で次のような話し合いになった。我家に着くと、口角泡を飛ばしながら、同級生が申し出た。

「済みません、どうか譲ってください。金額に文句は付けません。」

「いや、僕は会員権の相場なんか元々知りませんし、札幌から富山までの引越しですから、五十万もあれば十分です。」

「冗談でしょう。僕の知る限り、この会員権は今、百二十万から百八十万と聞きますし、第一、売り手が一人もないんで、僕達は本当に困っているのですよ。」

「じゃ、どうする？」

「どうする、と言ったって、俺には勝手に決められない。貴方から金額を言ってください。」

「いや、僕は五十万でいいとすでに言いました。」

かくして、二人の談合は上手くいかない。仕方ない、ここは自分の出番だと私も腹をくくる。

「じゃ、こうしよう。まず五十万以上で、百二十万より下の金額でどうだい。ずばり言えば、ここは百万で手を打とうよ。」

その瞬間、すべては決まった。その後、我家には娘達用のひな飾り一式と、新しいゴルフクラブ一セットが残っていた。

送り主は勿論、浅井さん。彼はその後間もなく、老いた実母を抱えるようにして札幌を離れて行った。

私はその時、四十歳。目の前にアラスカ行の計画が具体化する直前の時期だった。

(五) 四半世紀後の出会い

とうとう、浅井さんが私の前から消えて行った。それが今生の別れではないかと、思うこともあった。それはどうやら、違ったようだ。

浅井さんが富山に戻って間もなく、彼の実母であるあのお婆さんは死んで逝った。それを電話で伝えてきた彼の声は健やかだった。

その二年後、私の三女が札幌市内の高校に入った。しかしそこは、ランクでいうところの三流。次女・長男の入った高校に比べると、遙かに下の学校だった。

その第一学期の途中、次女は学校帰りに一寸したミスを犯し、自宅でも学校でも、気分よく暮らせる場所がなくなっていた。そんなある日、夕方自宅

に戻った父親の私を捕まえ、その三女が言った。

「パパ、私は転校してもいいかな。」

「どうして、……?」

「上手く言えないけど、転校したいんだ、私。」

その顔そつと覗くと、話の背後になにかがあるのか、父親だからどうにか分かった。

「だがね、高校の転学というのはそう簡単なものじゃないんだよ。」

「うん、でもね、その点は浅井先生が上手くやってくれてるって。」

「オイオイ、なんでこんな時に浅井さんの名前が出て来るんだ?」

「それも私には上手く言えないから、浅井先生にパパから電話を掛けてよ。」

「じゃ、そうするか。」

どうやら、この娘は自分の窮状を自分で救う能力はありそうだ。それはともかく、私はその場で電話を掛けた。

「浅井さん、こちらは鈴木です。今、娘から転校の話をかされたところだけど、娘のヤツは転校の理由も行先も自分で言わない。そして浅井さん、貴男に聞けばみんな分かる、と言うんだよ。」

「ああ、その話なら全部手続きは済んだ。私の借りた古い農家から自転車で通える高校に先だって出掛けてさ、校長の許可も取っているし、後は娘さんが自分の高校から、こちらの高校に必要な書類を送ればいいことになっている。貴方は五人も子供がいるのだから、一人くらい僕の所に寄越してもいいだろ。」

「……!?!」

―これはどうやら嵌められたらしい。―

そう思ったときはすでに遅かった。

その娘が移った先は富山県婦負郡婦中町、確かそんな名前で、私も二、三度訪ねて行った。

ところがその約一年後、高校二年の娘から秘密の電話が入った。

「パパ、聞いた。どうやら富山大学にある浅井先生の研究室に、突然若い女性が現れたんですって。」

「それがどうした。彼は大学の先生で、男子も女子も教えているだろ。」

「いや、違うってば。その若い女性が言うには、私は貴方の娘です。分かるでしょうか、と尋ねてきたそうよ。」

「それで浅井さん本人はなんて言っているんだ。」

「それが浅井先生らしいのよ。最初はまったく話が分からなくて困ったそうよ。でもね、その人から二五年前の東京時代を思い出してください、といわれてハツと思いがたることがあったというの。面白いよね、浅井先生は。」

そこで私は一旦、電話を切った。そして夜、改めて本人に電話をした。

「浅井さん、娘から昼間に電話をもらった。でも話が分かるようで、分からない。少しでいいけど、説明してくれない？」

「ああ、いいよ。馬鹿な話さ。学生時代に東京で夢中にやっていた全学連運動に関連する話だけど、大方は貴方にも話しているよね。あの時、全学連の活動拠点があるきっかけから東京女子医大の研究室の一面にあつてさ、後半に全学連が崩れ出した時、僕も若かったから荒れ放題に荒れてね。その時多分、一人や二人傍に女の医学生がいた筈なんだ。だからね、目の前の女性から苗字を聞いたとき、ハッと思い出したんだ。ある一人の女子医大生をね。」

「それでこれからその娘が僕と一緒に暮らしたいというから、そうするよ。」

「ああ、どうにかすべて分かりました。ご苦労さん、と言うべきかどうか分かりませんが、今やあのお母さんもない訳だから、一緒に暮らすのも十分考えられますね。じゃ、私の娘共々、どうかよろしくと言っておきましょう。」

その浅井さんは今から六年前の冬二月、富山の片隅でひっそりとこの世を去った、というニュースが少し遅れて手元に届いた。それを伝え聞いたとき、私は思った。

— 大事な人を失った。彼は友人として他の人と比べようのない男だった。 —

享年七七歳、彼はまさに、戦中戦後の混乱した社会の中で自分を貫き通した人物の一人。でもよく考えると、彼の心の中には寂しさと虚しさが常に同居していた、と思うのは私だけだろうか。

出来ることなら、病床に横たわる彼でいいから、後一度ゆっくり話し合う時間があったら、とつくづく思う今日この頃である。